

ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第十六

Jeff Pippenger

2025-12-22

十六番

まず、本題に入る前に、前置きが長くなることをお許しください。ヨエル書を直接検討するとき用いる論理の重要な構成要素となる、いくつかの預言的な筋道を先に据えておきたいのです。以前にも述べましたが、ヨエル書で「断ち切る」と訳されるヘブライ語の語は、その語源がアブラハムの時代に生贄を伴って契約を確証する方法にあります。

酔いどれどもよ、目を覚まして泣け。ぶどう酒を飲む者はみな、新しいぶどう酒のゆえに泣き叫べ。それはあなたがたの口から断たれたからだ。ヨエル書 1:5

ヘブライ語の「cut off」に当たる語は H3772 で、原始語根であり、「切る（切り離す、切り倒す、切り裂く）」、転義的には「滅ぼす・食い尽くす」、特に「契約を結ぶ（すなわち、同盟や取引を結ぶこと。もとは肉を切り裂き、その断片の間を通り抜けることによって行われた）」という意味を持つ。

私は、「cut off」に関するストロングの定義が、それを文法的な意味で「原始語根」と呼んでいることに気づいた。とはいえ、契約とアブラハムに結び付けられた「切ること」は、契約の光がその語に結び付けられていること、そしてその光がその原初的な歴史的根において示されていることを指し示している。契約史の観点における「cut」は、その原始的な根に基づく預言的象徴であり、文法的にも原始語根として同定されている。

第5節の宣告は、「新しいぶどう酒」によって表される後の雨のメッセージを彼らが持っていないことを示しているだけでなく、アブラハムにまで自らの「原初の根」を遡る契約の民である彼らが、神の契約の民としてその時その場で退けられていることも示している。

荒野で四十年にわたって死に絶えた世代は、自分たちの起源を、すなわち「多くの国々の父」を意味するアブラハムに求めた。

ヨシュアとともに約束の地に入った世代も、自分たちの起源をアブラハムに求めた。キリストを十字架につけたユダヤ人も、自分たちの起源をアブラハムに求めた。暗黒時代から出て、1844年に神に選ばれた契約の民として試され認められたプロテスタントも、自分たちの起源をアブラハムに求めた。1844年10月22日に至聖所に入ったミラー派のフィラデルフィア運動も、自分たちの起源をアブラハムに求めた。1863年にエリコを再建したミラー派のラオデキヤ運動も、自分たちの起源をアブラハムに求めた。間もなく来る日曜法の際に主の口から吐き出されるラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会も、自分たちの起源をアブラハムに求めた。

それらすべての世代は、ぶどう園のたとえを成就したか、あるいは成就するであろう。

ヨエル書の酔いどもは目を覚まして、自分たちが神の民として退けられ、後の雨のメッセージを持っていないことに気づく。したがって、その逆もまた真である。ヨエルが「栄光の冠」を戴いていると指し示す者たちは、その後、契約に入り、封印され、供え物としてささげられる。神と選ばれた民との最初に確証された契約は、日曜法から始まる神の民の最終の犠牲において表されるのと同じ「切り裂き」から始まった。その切り裂きとは、麦と毒麦の分離である。毒麦は退けられて火に投げ込まれ、麦はペンテコステの初穂の小麦の供え物として束ねられ、それが「昔の日々のように」高く掲げられる。

アブラハムの契約を表すものとして一般に挙げられる箇所は四つある。創世記12章でアブラハムは「召され」、彼を大いなる国民とするという約束が与えられる。これは契約の一部ではないが、約束への召し出しである。その時点では彼の名はアブラムである。というのも、契約関係のしるしの一つは改名だからである。アブラムの名は、契約の四つの段階のうち第三段階で変えられる。

神がアブラハムに約束をなされたとき、より偉大な者にかけて誓うことができなかったので、ご自身にかけて誓って、こう言われた。「まことに、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたを大いに増し加える。」そして彼は、忍耐したのちに、約束を手に入れた。というのは、人は確かに自分より偉大な者にかけて誓い、確認のための誓いは彼らにとってすべての争いの終わりとなるからである。そこで神は、約束の相続人たちにご自身のご計画の不変性をいっそう豊かに示そうとして、誓いをもってそれを保証された。これは、神が偽ることのない二つの不変の事柄によって、目の前に置かれた望みをつかむために避け所に逃れてきた私たちが、力強い励ましを得るためである。この望みは、魂の錨のように確かであり、垂れ幕の内側にまで入り、そこには先駆者として私たちのためにイエスが入り、メルキゼデクの位にしたがって永遠の大祭司となられた。ヘブル人への手紙 6:13-20。

その召しはアブラムへの神の約束であり、その後続く「誓い」によって神は第二の証しを与えられた。続く「誓い」は三重のものであった。第一の段階である約束の召しの後、第二・第三・第四の段階が、神が選民と結ばれた実際の三重の契約である。創世記15章では、裂かれた動物の間を神ご自身だけが通るという劇的な儀式を通して、神は正式に契約を「切り」（すなわち確立し）、アブラハムの子孫に土地を無条件に約束された。約束の地は、エジプトの川とユーフラテス川という二つの川の間として示された。三重の契約の第一の段階には、二つの川という預言的象徴と、その象徴に結びつくすべてへの直接的な言及が含まれている。啓示が、いま成就の途上にある出来事としてウライ川とヒッデケル川を指し示すとき、その二つの川はアブラムの預言において予表されていた。舞台はアブラムの二つの川の間であり、それがダニエルの二つの川と結び合わされると四つの川となる。というのも、キリストの御声は多くの水の声だからである。

その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あなたの子孫にこの地を与えた。エジプトの川から、大いなる川、ユーフラテス川に至るまで——ケニ人、ケナズ人、カドモニ人、ヘテ人、ペリジ人、レファイム人、アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人。」創世記 15:18-21

アブラムに約束された地は全世界であり、終末の時代には十人の王によって表されているが、契約の初期には王ではなく十の部族として挙げられていた。十四万四千人は全世界

と対立することになる。その後、世界は、地の十人の王を支配する黙示録17章の緋色の淫婦の指揮のもと、一つの世界政府による日曜礼拝の強制という試練の過程に巻き込まれる。アブラムにおいては、獣の像における政教一致の象徴は、国家権力の象徴であるエジプトの川と、教権の象徴であるバビロンの川によって表されている。

これらのことの後、主の言葉が幻のうちにアブラムに臨んで言われた、

恐れるな、アブラムよ。わたしはあなたの盾、あなたの非常に大いなる報いである。

アブラムは言った。「主なる神よ、私は子がありません。私に何をお与えくださるのですか。私の家の家令はダマスコのエリエゼルです。」アブラムはまた言った。「ご覧ください、あなたは私に子孫をお与えになりませんでした。ご覧ください、私の家で生まれた者が私の相続人です。」すると、主の言葉が彼に臨んでこう言った、

この者はあなたの相続人とはならない。しかし、あなたの身から出る者があなたの相続人となる。彼を外へ連れ出し、言った、「今、天を仰ぎ見て、もし数えることができるなら、星を数えなさい。」そして彼に言った、「あなたの子孫はこのようになる。」

彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。そして主は彼に言われた、

わたしは、あなたにこの地を受け継がせるため、カルデヤ人のウルからあなたを連れ出した主である。

そして彼は言った。「主なる神よ、私がそれを受け継ぐことを、どのようにして知りましょうか。」そして彼は彼に言った。

わたしのために、三歳の雌の子牛一頭、三歳の雌やぎ一匹、三歳の雄羊一頭、山ばと一羽、若い鳩一羽を持って来なさい。

彼はそれらをすべて取り、真ん中から二つに裂き、それぞれの半身を互いに向かい合わせに並べた。ただし、鳥は裂かなかつた。やがて鳥がその死骸の上に降りてきたので、アブラムはそれらを追い払った。日が沈みかけたころ、アブラムに深い眠りが臨み、見よ、大いなる暗闇の恐怖が彼の上に臨んだ。そして彼はアブラムに言った。

よく知っておきなさい。あなたの子孫は、自分たちのものではない土地で寄留者となり、その人々に仕え、四百年の間、苦しめられる。また、彼らが仕えるその国をも、わたしは裁く。そののち、彼らは多くの財を携えて出て来るだろう。

そしてあなたは安らかに先祖のもとに行き、良き老年に至って葬られるであろう。

しかし四代の後に、彼らは再びここに戻って来る。アモリ人の不義はまだ満ちていないからである。

そして、日が沈み、暗くなったとき、見よ、煙の立つ炉と燃えるたいまつが、その切り分けたものの間を通った。創世記 15:1-17。

夜は火の柱、昼は雲の柱となってモーセとイスラエルの子らを導くお方は、煙の立つ炉と燃えるともしびとして、それらの「切られた」部分の間を通り過ぎた。

主は、彼らを導くために、昼は雲の柱となって彼らの前を進み、夜は火の柱となって彼らを照らし、こうして彼らは昼も夜も進むことができた。主は、昼の雲の柱も夜の火の柱も、民の前から取り去らなかつた。出エジプト記 13:21, 22.

燃えるたいまつと煙る炉は、雲の柱または火の柱を象徴していた。また、それは、神がアブラムと契約を結ぶことに関わる三つの段階のうち第一の段階に関する預言的要素を表している。この章は「恐れるな」という言葉で始まる。というのも、第一の天使のメッセージは「神を畏れよ」であり、アブラムのように神を畏れる者は、神を恐れる必要がないからである。人には二つの類があるゆえに、恐れにも二種類がある。

契約に関する記述をさらに読み進めると、アブラムは神を信じ、それが彼の義とみなされた。三人の天使は、ヨハネが示す聖霊の働きと並行している。ヨハネは、聖霊が三つの事柄、すなわち罪、義、さばきについて人々に自覚を促すと教えている。これらの特質は三人の天使と一致する。したがって、契約の箇所では神への畏れが示された後、第二段階である義が明らかにされ、続いて裁きの宣告が来る。これは聖霊の第三の働きであり、第三の天使のメッセージである。契約の第一段階は第一の天使のメッセージを象徴しており、それは常に三つのメッセージすべてのフラクタルである。契約の過程の三つの段階は、黙示録14章の三人の天使を表している。

アブラムが義と認められ、それが第二の天使の段階を画することとなった後、彼はささげ物を備える。というのも、ささげ物は裁きの第三段階の直前に備えられるからである。そのささげ物は、旗印として高く掲げられるマラキ書3章のレビ人のささげ物を表している。モーセの生涯における三つの四十年期が三天使の使命を表しているのと同様に、モーセの最初の四十年には、その三天使の使命の三つの段階すべてが含まれている。

モーセの証しの始まりは、彼の両親が神を畏れたこと（第一段階）であり、その後には外見による試験が続く。第二段階には外見による試験が含まれており、ダニエル書第1章の場合のように、ダニエルはまず神を畏れてバビロンの食事を拒み、その後、身体的な外見に基づいて試された。さらにダニエルにとっては、その三年後に第三の試験があり、それはネブカドネザル王によるもので、この王は北の王と（第三の天使のメッセージである）日曜法の象徴であった。

モーセの両親は神を畏れ、彼を水に浮かべた箱舟に入れた。ファラオの娘はその状況を見るよう導かれ、その子を救うべきだという判断を下した。モーセの生涯の始まりは、神が人類と結んだ契約の一つの例証であり、さらに神はモーセを通して、人類の中から選ばれた国民とも契約を結んだ。ノアが人類と結んだ契約は大群衆を表し、モーセが選ばれた民と結んだ契約は十四万四千人を表す。契約を確証するためにアブラムがささげるはずだった供え物には、ノアの契約のしるしが示されており、幾世紀も後にアブラムの預言を成就したモーセについても同様であった。

供え物は五種の動物から成っていた。三歳の雌牛、三歳の雌やぎ、三歳の雄羊、山ばと、そして若い鳩である。鳥は切り裂かなかつたが、雌牛と雄羊と雌やぎは「二つに切り分け」られた。この供え物は、終わりの日に掲げられる旗印が人類に対する目に見える試験となることを象徴している。ファラオの娘にとっての視覚的なしるしは、箱舟の中の幼子モーセであった。箱舟は、箱舟にいた八つの魂によって象徴されている。「八」という数は

、十四万四千の旗印の予言的特徴の一つとして確立されている。五つの動物の供え物を考え、三つを半分にすると、供え物は八つの部分から成ることになる。これはノアによって型示され、さらにアブラムの供え物によって確認される。

その五つの動物は、神の指示どおりに裂かれると「八」という数を表し、そのことによって、箱舟にいた「八」人の魂によって型示されていた、世の終わりにおける魂たちを表している。アブラムの三重の契約の第二段階である割礼のしるしは、生後「八」日目に施すことと定められており、その儀式は、「八」日目に起こったキリストの復活を象徴する洗礼に置き換えられた。「八」という数は、ノアとモーセ双方の契約における確立された特徴であり、これらの契約は、旗印として捧げられて高く掲げられる十四万四千人を型示している。彼らは、「七」に属する「八番目」である。

その五匹の動物は、箱舟の「八」によって型取られている五人の賢いおとめを象徴しており、彼女たちは死を見ることなく古い世界から新しい世界へと移る。

アブラムの捧げ物は清い捧げ物であった。というのも、その捧げ物に用いられた動物はすべて清い動物であり、しかもそれらは合わせて、全焼のいけにえに用いられる主要な動物を表しているからである。第一の天使のメッセージには創造主を礼拝せよという命令が含まれており、アブラムの預言がモーセの時代に成就したときに制定された聖所の奉仕における主要な犠牲動物は、礼拝の捧げ物として掲げられており、同時に創造主を礼拝せよという第一の天使の呼びかけをも象徴している。

十八節は明確にこう述べている。「その日、主はアブラムと契約を結ばれた。」これは、『黙示録』十四章の三人の天使を象徴する三つの段階のうち第一の段階を示している。創世記十五章における契約の段階は『黙示録』十四章の第一の天使のメッセージを表しており、これに続く第二の天使は、創世記十七章に見られるアブラムの契約の第二段階によって予表されている。

第二の段階では、アブラムの名がアブラハムに改められる。アブラムは「父は高められている」を意味し、アブラハムは「多くの国々の父」を意味する。アブラムの召しにおいては大きいなる国民となるとの約束が与えられたが、アブラムの名が変えられるまでその約束は確証されなかった。そのとき彼は、選ばれた契約の民の最初の父祖となった。次の段階は、アブラハムがイサクをささげることで試みられた出来事によって第三天使のメッセージを象徴しており、それは十字架を象徴し、それは1844年10月22日を象徴し、さらにそれは日曜法-すなわち第三天使のメッセージ-を象徴している。その第三の契約の段階は1844年10月22日に成就し、それは創世記22章に示されている。

第二の段階、すなわちアブラムの名が変えられる第二天使のメッセージにおいて、割礼の儀式が、契約の民と神との関係の「しるし」として制定される。神の民が封印されるのは、第二天使のメッセージの歴史においてである。彼らが旗印として掲げられるのは、日曜法によって表される第三天使のメッセージの時である。しかし、封印されるのは日曜法の直前の期間であり、それはミラー運動の歴史では1844年10月22日に戸が閉じられる直前に当たる。

同様のことは、バビロンから出された三つの勅令にも当てはまる。これらによって2300年の預言が始まり、その預言は1844年10月22日の第三天使の到来で終わった。神殿は第一の後、第三の前に当たる第二の勅令の時代に完成した。基礎は第一の勅令の時代に据えられ、神殿の建築は第二の勅令の時代に完成した。紀元前457年の第三の勅令が2300年の起点となり、その勅令自体がユダヤ人に国家主権を回復した。第三の道標においては王国が打ち立てられるが、これは第三の勅令における国家主権の回復と、日曜法において凱旋する教会が旗印として掲げられることによって表されている。

第三の勅令は、1844年10月22日に第三の天使が婚礼に臨むべく到来したことを予表していた。花嫁は婚礼ではなく、その前に自らを整える。十四万四千人の封印は、預言的に「獣の像の試験」と表される時期に、日曜法の直前に施される。私たちは、「獣の像の試験」が、恵みの時が閉じられる前に私たちが通過しなければならない試験であると知らされている。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してください。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

1844年10月22日に戸が閉じたが、これは日曜法のときの閉じた戸を象徴している。ホワイト夫人は、獣の像の試験は、恵みの時が閉じる「前に」私たちが通過しなければならない試験であり、また、この試験において私たちの永遠の運命が決定されると述べている。日曜法の前に、花嫁は自らを備えるが、そのためにはふさわしい婚礼の衣を身に着けることが求められ、その衣は契約の使者の精錬の火によって清められなければならない。封印は婚礼の前に施され、その後、婚礼は日曜法のときに行われる。

ホワイト夫人は、封印とは知的にも霊的にも真理のうちに確立されることであると指摘している。さらに、神の民が封印される「とき」には、「そのとき」神の裁きによる揺さぶりが来るとも述べている。その揺さぶりとは、黙示録11章の地震、すなわちアメリカ合衆国の日曜法において始まる裁きのことである。

ミラー派の神殿は真夜中の叫びの時に完成し、封印は審判の第三の標石の前に押されることを示している。アブラハムの契約において、審判の第三の段階はモリヤの山におけるイサクであり、それは十字架上のキリストだけでなく、マラキ3章のレビ人の捧げ物も予表している。

彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬する。それは、彼らが主に義のささげ物をささげるためである。そのとき、ユダとエル

サレムのささげ物は、昔の日々、いにしえの年のように、主に喜ばれるものとなる。

そして、わたしは裁きのためにあなたがたに近づく。わたしは、魔術を行う者、姦通する者、偽って誓う者、雇い人の賃金を搾取する者、やもめとみなしごを虐げる者、寄留者の権利を曲げる者、そしてわたしを恐れない者に対して、速やかに証言する、と万軍の主は言われる。マラキ 3:3-5。

清めの過程の後、供え物は「その時」昔のようになり、そしてその供え物は裁きの最終段階の間に準備される。というのも、まさにその時、清められ供え物として備えられたレビ人が、キリストが彼女たちに対して「すみやかな証人」となられる愚かな乙女たちと対比されるからである。「すみやかな証人」とは、「ラオデキアの教会への忠実な証人」のことで、彼はシェブナを球のように遠い野へ投げ込み、ラオデキア人をその口から勢いよく吐き出す方である。麦と毒麦の分離はすみやかに行われる。最後の動きは迅速なものだからである。そのすみやかな使者とは、マラキ書3章でご自分の宮に突然来られる方である。

「昔の日のように」とあるマラキ書の捧げ物を高く掲げることは、十四万四千の旗印を高く掲げることであり、ペンテコステの二つの揺り動かすパンの供え物を高く掲げることであり、荒野で竿に蛇を高く掲げることであり、十字架上でキリストを高く掲げることであり、また、全世界が驚嘆し不思議がった中、燃える炉でキリストと共にいたシャテラク、メシャク、アベデネゴが高く掲げられることであり、1843年の図表の刊行であり、そして1850年の図表のために意図された目的でもあった。

アブラハムの契約の第二段階において、割礼の儀式が制定され、施行され、これが契約のしるしとなった。モーセとは異なり、アブラハムはイサクに直ちに割礼を施したため、第三段階で彼をいけにえとして持ち上げたとき、イサクはそのしるしを体現することになった。そのしるしは後に洗礼に取って代わられ、両者は共に十字架のしるしを証しする二つの証人となる。

「彼の民の額に押される、生ける神の封印とは何か。それは天使には読み取れるが、人間の目には読めない印である。というのも、滅びの天使はこの贖いのしるしを見なければならぬからである。理解ある心は、主に養子とされた息子たちと娘たちのうちに、カルバリーの十字架のしるしを見ている。神の律法に対する違反の罪は取り除かれている。彼らは婚礼の衣を身にまとい、神のすべての命令に従順で忠実である。」
『原稿集』第21号、51。

創世記十五章における契約の第一段階では、奴隷状態での四百年という期間に関する預言が示され、パウロは同じ期間を四百三十年としている。パウロの計算は出エジプト記十二章における召し出しから始まっており、彼はアブラムの寄留の期間を含めているからである。よく考えると、三十年と関連づけられた四百年はパウロが提示した一つの象徴であり、アブラムが示した四百年は別の象徴である。では、四百年の期間は何を表し、四百三十年の期間は何を表し、三十年は何を表すのか。

学者たちは、四百三十年が各二百十五年からなる二つの期間に分けられ、第一の期間は束縛や奴隷状態から自由で、第二の期間は奴隷状態であることを的確に示している。

アブラハムは75歳でカナンに入り、アブラハムが100歳のとき（25年後）にイサクが生まれた。ヤコブが生まれたのはイサクが60歳のときで、ヤコブは130歳のときにエジプトに入った。これを合計すると、カナンで215年、エジプトで215年、合わせて430年となる。預言を学ぶ者にとって、これは二つの契約の象徴からの二つの証言を提供する。アブラムと同様、パウロも名が変えられた。パウロは430を、アブラムは400を示す。相互に関連する二つの期間に関する預言の、行に行を重ねるような成就是、神に選ばれた民の確立へと導いた最初の契約の期間に結びついている。

キリストが一週のあいだ多くの者と契約を堅くするために歴史に現れたとき、その一週は相互に関連する二つの時の預言を表していた。パウロの430年の預言は、キリストの一週と同様に、等しい二つに分けることができる。すなわち、カナンでの215年とそれに続くエジプトでの215年は、キリストご自身による1260日の証しと、それに続く弟子たちを通してのキリストの証しの1260日を象徴している。キリストが契約を堅くした2520日も、「その契約の争い」である七つの時を表している。

紀元前723年から1798年までは2520年であり、その年数は1260年ずつの二つの期間に分けられる。これは、異教が1260年間にわたって聖所と軍勢を踏みにじり、その後に教皇制が1260年間にわたって聖所と軍勢を踏みにじることを表している。キリストの一週の本真中は十字架であり、週の間（538年）は、異教の証しの1260年に続いて、異教の弟子たる教皇制からの異教の証しの1260年をもたらす。十字架においてキリストの恵みの王国が権能を受けたとき、それは反キリストの王国が権能を受けた538年を予表していた。十字架において、文字通りのイスラエルは退けられ、霊的イスラエルが始まった。538年には、文字通りの異教は退けられ、霊的異教が始まった。

アブラムの四百年の預言は、四百三十年でもある。同じ預言だが、二つの契約の象徴によって示されている。その互いに関連する二つの年代預言は、古代イスラエルの契約史の始まりに成就する神の民の隷属と解放を指し示していた。古代イスラエルの契約史の終わりにおいては、一日を一年に対応させる関係において一つの年代預言が別のものと一致し、こうして解放と隷属を強調する二つの年代預言が特定される。

古代イスラエルの始まりと終わりのあいだの歴史の中ほどに、バビロン捕囚下のダニエルがいる。束縛と解放の約束を示すその契約史から、古代イスラエルの契約史と現代イスラエルの契約史を結び合わせる預言が提示される。ダニエル書には、二つの年代預言が示されている。レビ記26章にあるモーセの「七たび」の「誓い」はダニエル9章11節で示されており、またダニエル8章の13節の問いは14節の答えへと導かれ、それによって2300年の預言が明らかにされている。その「誓い」は破られるとダニエル9章11節の「モーセの呪い」となり、南王国に対して紀元前677年に執行され、2300年と同様に1844年10月22日に終結した。二つの2520年の離散は13節の問いの中に位置づけられており、14節の答えは2300年である。

古代イスラエルの契約の歴史のアルファであるモーセの場合と同様に、またその契約の歴史のオメガであるキリストの場合と同様に、現代イスラエルの始まりであるアルファの歴史にも、相互に関連する二つの時の預言が含まれていた。ひとつは隷属と奴隷状態を、もうひとつは解放を表していた。古代イスラエルのアルファの歴史における430年を二

つの等しい期間に分けることは、キリストが契約を確認した一週において繰り返されたその預言的な分割の型を示しており、また契約違反に対する裁きの相互に関連する期間も二つの等しい期間に分割されたことと相まって、二つの証しを立てている。すなわち、現代イスラエルのアルファの歴史にも同様の預言的な錨があるということである。2520年と2300年が同時に終わることは、途中で等しく二分される預言を内包した、相互に関連する二つの時の預言に関する第三の証しを提供する。

三つの証言は、現代イスラエルのオメガの歴史において主が十四万四千人と契約を結ばれるとき、預言的な時に関する互いに関連する二つの予言があり、さらに、それに関連した期間が二つの等しい部分に分けられていると人に期待させるだろうが、しかしそうではありえない。というのも、主が現代イスラエルと契約を結ばれたとき、主は御手を天に挙げ、時はもはやないと宣言されたからである。

十四万四千人の契約は、初穂の小麦の供え物の二つの揺り動かすパンによって表されている。三つの証しがあり、その後には預言の時の区別を欠いた二重の証しが続くという預言的構造は、アブラムが等しく二つに裂いた雌の子牛、雌やぎ、雄羊をささげ、その後には山ばとと鳩をささげた供え物の中に見いだされる。

最初の三つの供え物には、いずれもその象徴に三年が結び付けられており、それによって、それらが預言的な時を備えた三つの供え物を表していることが示されていた。三つの供え物はいずれも預言的な時を持っていただけでなく、その預言的な時はそれぞれ二つの期間に等しく分けられていた。山鳩と鳩には年齢の定めはなく、ただ若ければよかった。というのも、それらは、二羽の鳥、すなわち二つの群れとして表される契約の民の最後の世代を表しているからである。

二つの群れは大群衆と十四万四千人を表しているが、二羽の鳥には第二の意味がある。鳩は聖所への供え物の一つであり、鳩を供え物としてどう記述しているかを調べると、多くの場合それは山ばとの一種を意味している。ところが、アブラムの供え物における鳩は、羽がまだ生えていないほど若い鳥、あるいはそれどころか羽をむしり取られた鳥を指している。この預言的水準では、二羽の鳥は小麦と毒麦である。

終わりの日々には、旗印は鳥のように天に掲げられる。そしてそれは、二羽の不浄な鳥が邪悪を持ち上げ、シンアルで彼女をその玉座に据えようとしているまさにその時に起こる。

それから、私と語っていた御使いが進み出て、私に言った。「今、あなたの目を上げて、出て行くこのものが何であるか見よ。」私は言った。「それは何ですか。」彼は言った。「これは出て行くエファである。」さらに言った。「これは全地における彼らの姿である。」そして、見よ、一タラントの鉛が持ち上げられた。これは、エファの中に座っている女である。

彼は言った。「これは邪悪だ。」そして彼はそれをエファの中ほどに投げ入れ、その口の上に鉛の重しを投げつけた。

そのとき、私は目を上げて見ると、見よ、二人の女が出てきた。彼女たちの翼には風があり、こうのとりの翼のような翼を持っていた。彼女たちはそのエファの枘を地と

天との間に持ち上げた。そこで私は、私に語っていた御使いに言った、「あの者たちはそのエファの枘をどこへ運んで行くのですか。」彼は私に言った、「それに家を建てるために、シナルの地へ。やがてそれは整えられ、そこに自分の台座の上に据えられる。」ゼカリヤ書 5:5-11

「悪」として、またパウロによっては「不法の者」として表される教皇権は、1798年、彼女が座っているかごの上に一タラントの鉛がかぶせられたときに致命的な傷を受けた。その後、心霊主義と背教的プロテスタンティズムが彼女を持ち上げ、シナルに彼女のための家を建てることになるが、それは神が、ご自身が旗印として掲げようとしておられる家の建設を完成されたのと同じ時点である。ゼカリヤ書では、にせの旗印は「悪」の女であり、旗印は鳩として表されている。やがて世界は、あらゆる汚れた忌むべき鳥の檻であるローマか、人類との神の契約の象徴である鳩かのどちらかを選ぶことになる。

彼は力ある大声で叫び、こう言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。悪霊どもの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巣窟となり、すべての汚れた憎むべき鳥の檻となった。」ヨハネの黙示録 18:2.

キリストはご自身の死と復活に関連して、「この神殿を壊してみよ。私は三日でそれを建て直す」と語られた。その三日間は、モーセ、キリスト、そしてミラー派の場合にそうであったように、神殿が建てられる預言的な期間を表している。アブラムが捧げた雌の子牛、雌やぎ、雄羊を三歳のものとする要求は、今私たちが考察している三つの契約の歴史それぞれにおいて神殿が築かれることを示している。十四万四千の最終的な契約の神殿は、天に冠として掲げられる旗印である。このため、雌の子牛、雌やぎ、雄羊は地の獣であり、天を飛ぶ鳥と区別されている。終わりの日に築かれる契約の神殿とは、エルサレムがすべての丘や山々の上に高く掲げられる時のことである。

アブラムの三つの契約段階のうち第一のすべての要素をまだ特定しきれてはいないが、これまでに検討してきた各要素は、古代の文字どおりのイスラエルの始まりと終わり、そして現代のイスラエルの始まりに、それぞれ対応するものがある。私たちは、アブラムの第一の契約段階の中に、黙示録14章の天使たちの三つの段階を示してきた。アブラムの第一の契約段階に見られる三人の天使のフラクタルは、アブラムの第二および第三の契約段階を考察すると、さらにいっそう明確に裏づけられるだろう。

アブラムの「八つ」のささげ物は、のちにモーセの時代の聖所の儀式の一部となるささげ物を表すにとどまらず、神の契約の民の物語における預言の時の役割を明らかにし、確証する。それらは、イスラエルが神に選ばれた民としての始まりと終わりを、文字通りであれ霊的であれ、確証する。

パウロの430年は、アブラムの400年と論理的に切り離すことのできない預言的な期間である。両者を重ね合わせると、まず30年の期間が現れ、その後に400年が続く。次回の記事はここから続けます。

旧約聖書に記された預言は、終わりの日のための主の言葉であり、私たちがサンフランシスコの荒廃を目の当たりにしたのと同じ確かさで必ず成就する。書簡154号、1906年5月26日。